Provoke

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｒｏｖｏｋｅ

【Ｎコード】
Ｎ５３６７Ｒ

【作者名】
沙希

【あらすじ】
「あの、坂本さん。もしかして俺はあなたに嫌われているのでしょうか？」――――――ある日、高校三年生の坂本梨香はクラスメイトの吉岡恭祐にそう聞かれる。梨香は決して、吉岡を嫌っているわけではない。でも、吉岡は梨香にとってまぶしすぎた。（本作品は以前、別サイトで完結済み作品として発表していました。転載作品となります）

放課後の教室

「あの、坂本さん。もしかして俺はあなたに嫌われているのでしょうか？」

大真面目な表情と口調でそう私に尋ねてきたのはクラスメイトの吉岡恭祐（よしおかきょうすけ）だった。目は悪戯っぽく笑っていたけれど。

高校三年生ではじめて同じクラスになった吉岡。

別に私は吉岡を嫌ってなどないし、今までにそんな態度を彼に示したことはなかったはずだ。

……たぶん。

私は吉岡を嫌ってはいない。

だが吉岡のその質問はなかなか私の痛いところをついていた。

「なにそれ？別に嫌ってなんかないよ。それになんですかその口調は」

私は笑って、それから吉岡の口調をからかった。

「本当に？」

自身の口調については触れず、吉岡は軽くわたしの顔をのぞきこ

むように聞いてくる。
……顔が近い。恋愛感情があろうとなかろうと、イケメンとの必要以上の接近は心臓に悪い。

「うん。だいたい、学年一の人気者を嫌う人間なんていないでしょ」

吉岡に近づかれた分、笑いながらさりげなく私は後退する。

「いや坂本さん、俺は学校一の人気者だからそこはお間違いなくっ！！」
「そういうのは自分で言っちゃダメだよ」
「イメージダウン？」
「そうそう。あくまでポーカーフェイスにね」
「……ポーカーフェイスって俺のキャラと違くね？」
「確かに」

吉岡と私は顔を見合わせて、それからぶっと大きく笑った。
ケラケラとひとしきり笑ったあと、教室の時計にふと目をやった吉岡が「ヤベっ！」と叫ぶ。
ホームルームを終えた放課後、部活動がはじまる時刻だった。

「部活に遅刻するっ！」
「あらあら。部長が遅刻じゃ、他の部員に示しがつきませんね～。さっさといってらっしゃい」

慌てて自分の机に置いてあったカバンを引っつかみ、吉岡は教室を飛び出した。
帰宅部の私は手をひらひらさせて吉岡を見送る。
吉岡が教室を出るのを見届けた私がふうっと溜息を吐いた瞬間、ひょっこりとイケメンが教室の扉から顔をのぞかせた。

「坂本、また明日な」

にっこりと吉岡は笑って、それからまた顔を引っ込め走り去っていく。
廊下から聞こえる吉岡の足音は見事なまでにかろやかだった。
さわやかな笑顔。
さわやかな立ち去り方。
私は目をつぶって呟いた。

「……だから心臓に悪いんだって」

――――イケメンの笑顔は。
そして私の表情は最高なまでに複雑だった。

放課後の教室（後書き）

こんにちは。
本作品は以前、別サイトにて発表していたものです。
時がたっていることもあり、小説家になろうさんで発表しようかどうか
悩みましたが、こちらに移すことにしました。

多少、手を加えましたが、
ほとんどオリジナルと変わりがありません。

ちょっとうじうじしている主人公ですが、
よければ最後まで読んでくださると嬉しいです！

生徒会室

勉強のデキはクラスの上位。
運動神経だって運動部で真面目にやっている子には負けるけど、大抵のスポーツなら人並み以上の結果を残せる。
友人関係も良好。明るくてポジティブな性格だと自覚があるし、まわりにもそう言われる。
ついでに両親や妹との関係も悪くない――――どころかうちの家族はすごく仲がいいと思う。土日のどちらかは必ず家族でカラオケに行くのが習慣、と友達に言って驚かれたのは一度や二度の話しじゃない。
そしてそんな家庭環境で育ったぐらいだから、グレルことなく真面目な長女気質の性格。部活動はやってないけど、クラスでは学級委員でさらに委員会の中では委員長だ。学級委員会委員長は自動的に生徒会に属することにうちの学校ではなっていて、その生徒会ではかなり頼られるポジションにいる。生徒会長がなんらかの理由で不在の時は副会長のサポートを、副会長がいない時は副会長代理を任されたりしている。

まあ、ここまで言えばわかってもらえると思うけど、坂本梨香（さかもとりか）っていう人間はようするに『優等生』の部類に入るわけです。
けどこの『優等生』はどうしもようないぐらい、――――不器用で、努力のできない人間なんです。本当は。

「……素敵な自己分析結果の披露をありがとう。で、坂本梨香

さんはどうバカで不真面目なわけ？」

生徒会長の有栖川雪子（ありすがわゆきこ）が生徒会室の机に頬杖をつきながら私を見ている。彼女の口角はニコリではなくニヤリとあがっていて、私の話しにノッてくれているのがわかる。

雪子は頭がよくって、かつバカ騒ぎをするときは迷わず先頭に立ってくれる素晴らしい私の親友だった。

吉岡と教室で別れた私はそのまま生徒会室に来て、９月の文化祭にむけての書類を作成している雪子に『自己分析の結果』を猛烈に語りまくった。

そしてその結果、先ほどの雪子の台詞が出たのである。

だが雪子のその問いの答えこそ、私が吉岡恭祐に動揺させられた原因だった。

「ま、別に言わなくてもいいけど。梨香の気持ちなんて、友人暦イコール年齢の私には全部お見通しですから」

家がお隣さんで、幼稚園に入る前から一緒に遊んでいた雪子はこれまたニヤリと笑う。

だが私にはその雪子にニヤリが天使の微笑みに見えた。

「……雪子」

「はいはい。感動してくれなくてもいいから、とにかく吉岡にバレないように『普通の態度』をちゃんととりなよ。じゃないと、友人関係は良好で明るくポジティブな坂本梨香にならないから」

スパッとした物言いを雪子はし、彼女は立ち上がり窓辺に近づいた。

「……雪子ってエスパー？私吉岡のことは今、全然一言も言わなかったのに」

私は驚きのあまり思わず眼が見開いていたと思う。

「だから友人暦イコール年齢の幼馴染には全部お見通しなんだって」

「いや、だからって――――」

「うん。嘘」

「えっ？！」

スットンキョな声を出した私に雪子は「なにその声」と大笑いをして、窓辺からグランドを指差した。

私も椅子から立ち上がって雪子の隣に立ち、窓から見えるグランドを見る。生徒会室は六階にあったから、グランドで部活動に励む生徒たちの顔まではよくわからない。だがグランドをいっぱいに使って練習に励む部がサッカー部であることはよくわかった。そしてその中心に吉岡恭祐が立ち、部員たちに何かを指示している。彼はサッカー部の部長だった。

ここからは遠くて見えないはずの吉岡の顔。

けれど私にはなぜか吉岡の顔がはっきりと見えた。いきいきと輝いて、チームの中心にいる吉岡。確かな実力と自信を持ち、チーム

から慕われる部長。
笑顔で部員たちと冗談を言い合う笑い声までもが聞こえる気がした。

ああ、幻聴が聞こえるなんて完全に病気だ。

私は本日何度目かの溜息を、雪子にバレないようにこっそりと吐く。

「職員室で聞いたんだけどね、今年のサッカー部かなり強いらしいよ。吉岡を中心に三年生レギュラーは過去最強に強いし、一年や二年もいい人材がいるって。今年の夏の大会は期待できるってさ」

サッカー部の動きを見つめながら雪子は言う。

うちの高校のサッカー部は中学からサッカー推薦や特待生扱いで入学してくる子ばかりの集団だった。運動部が強いうちの学校だが、その中でも特に強いのがサッカー部だった。ようするに他校にも名が知られているサッカーの強豪校だ。

「そっか。学校としてもサッカー部にお金かけてるんだから、勝ってくれたら万々歳だろうね」
「本当だよ。———知ってる？噂だけどサッカー部専用のグランドを作る計画があるんだって」

さすがは生徒会長というか、雪子は学校のことをよく知っていた。先生受けのいい彼女は噂レベルから生徒たちへの正式発表前の裏事情まで、どうしてそこまで知っているのか恐ろしくなるぐらいに物知りだった。

「そうなの？それは知らなかった。でもさ、前に野球部専用のマウンドを作るとか作らないとかの噂もあったよね」

「あった、あった。でもあれ、結局寄付金が足りなくてナシになったみたい」

「寄付金不足かぁ～。私立の学校なんだからポンッと寄付してくれる保護者が学年のどっかにいないのかね」

私は笑って窓に背を向けて再び椅子に座る。内心、話題が吉岡の話しからそれたことにホッとしながら。雪子に心のもやもやを全部話そうと思って、まず自分なりの自己分析を語ったのだがやはり核心に触れるのは勇気がいる。

「でも、吉岡率いる今年のサッカー部にならポンッと寄付金が集まるかもね。さわやかイケメン代表の吉岡は保護者人気も高いから」

私と同じように雪子も窓に背を向け、まっすぐ私の顔を見ながら雪子は言う。彼女の表情は今度こそニヤリではなく、優しい微笑みだった。

「吉岡ね、今朝私に聞いてきたんだよ。『坂本さんに俺、嫌われてるのかな？有栖川、なんか知らない？』って」
「うそ」

今日一番のビックリだった。雪子にそう聞くぐらい、私は坂本に対して負のオーラを放っていたのだろうか。だとしたら吉岡に申し訳なさすぎる。だって私は別に吉岡のことを嫌っているわけではないのだ。

「あの雪子さん、それで吉岡になんて言ったの？」
「そんな上目使いで聞いてくれなくても、もちろん言ってないよ。梨香の気持ちは」

雪子は笑う。

「吉岡には、『あんたの気のせい。ってかちょっと自意識過剰なんじゃない？』って言っといてあげたから」

普段から強気な発言が多い雪子。そんな物言いをしても敵を作らないのは彼女がもつ持ち前の明るさや、ある種の『公正』さゆえだ。

「なんて毒舌。……でもありがとう」
「どういたしまして」

雪子はすっと私の隣の椅子に座る。
そして彼女は私に優しい瞳をむけて言った。

「あのね、梨香。はっきり言うと、吉岡はあんたが好きなんだよ。だから今の状況は吉岡が正直、かわいそうだと思っている」
「……よ、吉岡が私を好きって直接言ったわけじゃないんでしょ？そんなこと言って、吉岡に失礼だよっ」

私は顔を赤くして、雪子の言葉に抗議する。

「ううん。吉岡は梨香が好きなんだよ。本人から直接そう聞いた」

私の反論にむっとすることなく、ひたすらあたたかい眼差しで雪子は私を見てくれる。
でもだからこそ、雪子があんまりにも穏やかにそう言うから、私は彼女の言葉が頭に完全にインプットされるのに時間がかかった。

「嘘。……吉岡が本当にそう言ったの？」
「本当、本当。今朝、吉岡が雪子に自分が嫌われているんじゃないかって聞いてくるから、『雪子のことが好きなの？』って聞いてみたの。そしたらあっさり、認めたよ」
「……」
「それでたぶんね、私にそう聞いてきて、放課後に直接あんたに

聞いてくるぐらいなんだから、吉岡的にはそうとう堪えてるんだよ。あんたに避けられていること。で、本当は吉岡があんたを好きってことは直接本人が言うべきことだけど、吉岡がかわいそうすぎるから言っちゃいました」

雪子は最後におどけるように、綺麗にマニキュアされた人差し指で私の眉間をつつく。

「別に私はあんたと吉岡をくっつけようなんて思ってない。でも別に嫌ってない人間を不愉快にさせて楽しむような人間じゃないでしょ、あんた」

「――――生徒会長、華美なマニキュアは校則違反です」

私のかわいくない言葉に雪子は方眉を吊り上げると、私の両頬をつねった。

「生徒会長、暴力もいけません」

「梨香ぁー」

「……生徒会長、大好きです。いつも心配してくれてありがとう。最高の親友です」

「――――――あんた、なんで泣いてるのよ」

雪子はしょうがないな、とでも言うような顔で苦笑し、ハンドタオルを差し出してくれた。

私の両目からはうっすらと涙がこみ上げ、それは徐々に大粒とな

っていくつもいくつも、目の端からこぼれた。

「あのね私、別に吉岡のこと嫌ってないよ」

私は雪子が差し出してくれたハンドタオルで顔を覆いながら、涙をしゃくりあげながら言った。

「むしろ好きか嫌いかで言ったら、間違いなく好きの部類に入る。だってさ、吉岡は誰もが認めるイケメンさんで性格だって明るくていいし、部活で忙しいはずなのに勉強もできるし、部長やってるぐらいでかなり頼りになるし、モテるくせしてチャラいところがなくて真面目だし、普通の高校三年生男子としたら出来すぎなぐらい出来すぎな男ですよ」

「……それ、吉岡に言ってあげなよ、きっと大喜びだから」

「でもね、でもね。吉岡はね、眩しすぎるんだよ」

雪子の言葉を無視して、私は話しを続ける。

「吉岡は出来すぎなの。なんか『えたいが知れない』んだよ。近づいちゃいけないんだよ。私にないものを余り余るほどもっていて、うらやましいんだよ。憎らしいんだよ。――――――憎らしいほど、大好きなんだよ」

私ははっと口をおさえた。

憎らしいほど、大好きなんだよ。
私の口から零れ落ちた言葉。

「よく自分のことわかってるじゃない」

そう言って雪子は私の頭を軽くなで、それからポンっと私の肩に抱き寄せる。雪子はいつだって、優しく私を慰めてくれる。

「……吉岡のこと嫌いじゃないけど、私にないものたくさん持っていてねたましいなってずっと思ってた。けどずっと、好きだなんて思ってなかった。気づいてなかった」

気づいたのはつい最近。
いや、それよりずっと前から自覚はあった。
吉岡が好きなのだ、と。
今まで吉岡への気持ちを誰かに口にしたことはなかった。けれど今、なぜかこんなにも簡単に想いがあふれてくる。

「梨香の吉岡への気持ちは『愛憎』ってやつだね。でもさ、別に梨香は吉岡をねたむ必要なんて全然ないと思うけど。たしかに吉岡にあって、梨香にないものはあるよ。けどそれを上回るぐらいに、梨香にはいいものがたくさんあると思う」
「そうかな……」

私の言葉は固かった。
だって私より吉岡のほうがずっといいものを持っている。輝いている。
吉岡は眩しい。
眩しすぎる。
私は吉岡が、憎らしいほどに嫉ましい。
憎らしいほどに、――――大好きだ。
私はぎゅっと目をつぶる。
この気持ちをどうすればいいのかわからない。
全然わからない。
心に余裕なんて何一つとしてなかった。

「さっき話したサッカー部の専用グランド、できるといいね。きっとサッカー馬鹿の吉岡は大喜びだよ。ま、吉岡たちは使えないけどね。グランド作るにしても、完成は私たちが卒業してからだろうし」
無理やりな話題の転換に関する私の反応がないことに気づいているのか気づいていないのか、雪子はそう言って笑うと、生徒会室に設置されているパソコンの電源をいれた。
「さてさて、そろそろ生徒会のお仕事に戻らなきゃね。梨香もちゃんと手伝いなさいよ」
「……うん」

私の返事は小さかった。

チェコスの階段

高校入学と同時に私は吉岡恭祐という人間を知った。
サッカー部に特待生として入ってきた期待の新入生。
吉岡とはクラスも違ったし、なんの接点もなかった。
だがその吉岡恭祐を形容するそのフレーズは学校内で知れ渡っていた。だから私は吉岡の顔を知らなくても、『吉岡恭祐』を知っていた。そして彼を形容する言葉は月日がたつことにどんどんと増えていった。

だが私は高一の夏休みが過ぎ、衣替えを終えてもまだ、彼の顔を見ることはなかった。クラスメイトの中には離れたクラスにいる吉岡をわざわざ見に行く子もいたけれど、私はそこまでの興味をもたなかった。
だいたい芸能人でもないのに、わざわざ接点のない生徒の顔を見に行くなんて、恥ずかしくないのだろうか。
カッコイイという噂だったし、１００パーセント興味がないと言ったら嘘だったけれど、羞恥心のほうが勝っていた。

だから学校外で制服を着ていない彼に偶然出会ったとき、私は彼が誰だかまったくわからかなかった。

「これはいらないんですか？」

家の近所にある区立図書館の閲覧室。利用者のために椅子と机が並べられたその部屋で、私は図書館に入ってきたばかりの新刊図書を読んでいた。
時刻は午後1時。開館の時間からいた私はさすがにお腹がすき、荷物をまとめると席と立ち上がった。
お昼ご飯に何を食べようかと考えながら出口に向かった時、私は肩を叩かれて呼び止められた。
振り返るとそこには自分が先ほどまで読んでいた小説を、私にむかって差し出す男の子がいた。自分の手元を見ると、六冊あったはずの本が五冊に減っている。

「あ、ごめんなさい。ありがとう」

そう言って男の子から差し出された本を受け取る。どうやら荷物をまとめた時に、一冊だけ置き忘れてしまったらしい。
男の子はにっこりと笑った。くったくのない笑顔だった。笑うとえくぼができて、それが彼を幼く見せた。
年上かと思ったけど、同い年ぐらいなのかな。
ぼんやりと頭の片隅でそう思う。
正直、さっきからカッコいい男の子だとは思っていた。
さわやかそうな好青年だな、と。
いや、同い年ぐらいっぽいから好青年なんて言わないのかもだけど、数年後は間違いなく好青年になるのがわかりきっているような男の子だった。

「あの、坂本さんですよね？」

「えっ？」

イケメンだなぁ～なんて思っていたら自分の名前を呼ばれて、ビックリする。反射的に彼の顔を見たが、やっぱり知らない顔だ。

「俺たち同じ学校ですよ。ちなみに同じ学年」

「あ、そうなんですか。えっと……」

「俺、４組の吉岡です。一昨日、学校で一年生だけの文化部と運動部の合同委員会があったでしょ？坂本さん、学級委員ってことで議長をやってたじゃないですか。だから俺、坂本さんのこと覚えてて」

確かに一昨日は学級委員として議長を務めた。けどその委員会の会議に参加した生徒の数は多くて、とてもじゃないが全員の顔なんて覚えてない。

けどこんなイケメンだったら覚えていてもよさそうなのに。

ああ、前に雪子に言われたとおりだ。

『梨香って全然恋愛に興味ないんだね。男子の顔とか、行動とか、あんまり気にしてみてないでしょ』

私ってやっぱりまだまだ恋愛とかに興味ないんだな。

いやでも、そんな男の子を観察するように見ているのもいかがなものか。

一瞬のうちにそんな思考が私の頭をよぎる。

「そっか。ごめんなさい。委員会に参加してた人の顔、全部覚えてなくって。えっと、吉岡くんは……運動部？」
「そうです。サッカー部」

私の隣に立つ男の子――――吉岡くんはそう言ってまた、さわやかに笑った。
なんだか、『さわやか』の無駄づかいだな。
彼の笑顔にときめくのではなく、そう思ってしまった私は思わず自分の考えに吹き出しそうになって慌てて口角をひきしめる。

あぶない。あぶない。

一人で勝手に笑い出すところだった。
こんなタイミングで笑ったりしたら、吉岡くんに変人だと思われてしまう。

「吉岡くんも本読むの好きなの？あ、ってか敬語じゃなくていいよね。同じ学年なんだし」

私はそんな自分を誤魔化すために、吉岡くんに話しをふる。吉岡くんも貸し出し最大の六冊を手に持っていた。

「うん。俺、けっこう本読むの好きで、前にこの本書いた人が書いた本が面白くって、新刊が出たっていうから読もうって思ってたんだ。特別ファンってわけじゃないんだけど」

よくよく見ると、彼が持っている小説はすべて著者が同じなようだ。そう私がわかったのは過去に自分がその内の何冊かを読んだことがあるからだった。

「それ『チェコスの階段』でしょ」

私の口角が上がる。
学校の図書館で借りて読んで、すごく面白かった。

「そうそう！学校の図書館で借りて、面白かったんだよな！！それで区立図書館のほうが新刊入るの早いし、この人の新刊があるんじゃないかと思って見に来たんだよ、今日」
「本当？私も『チェコスの階段』は学校の図書室で借りたんだよ」

もしかしたらまったく同じ本を借りていたのかもしれない。
そう思うと小さな偶然が嬉しい。なんだかはしゃいだ気分になる。

「そっか。偶然だな」

そう言って笑う吉岡くんの目も心なしか、この偶然を楽しんでいるような気がする。

「吉岡くんは本が好きなの？」
「おお。読書は趣味。最近は部活が忙しくてそんなに読めないんだけど、前は一週間に何冊も読んでたな」
「へえ。サッカー部って厳しいんでしょ？それであの分厚い『チェコスの階段』が読めるんだから、すごいね」
「時間はいつもよりかかっちゃったけどな」

吉岡くんは苦笑する。
ふとその時、私は図書館司書のお姉さんがこちらを軽く睨んでいるのを見つけてしまった。
私たちはずいぶんと大声で会話をしていたかもしれない。
公の図書館で大きな声で会話していたら怒られても仕方ない。

「吉岡くん」

私はそっとささやき、それから顔をくいっとむけて吉岡の視線を司書が駐在するカウンターにむけさせる。
吉岡くんもすぐに事態に気づいて、「まいったな」という顔をする。

「坂本さん、外でない？完全に居づらい感じだし」

小声の提案に私はすぐさま頷いた。
だって吉岡くんとの会話は楽しかったから。

私は笑顔で吉岡くんと図書館の外に出た。

沈まぬもの

生徒会室での仕事を終え、私は学校の昇降口で雪子を待っていた。雪子は職員室に生徒会室の鍵を返却しに行っている。

ぼんやりと昇降口から見えるグランドの景色を眺める。野球部員がグランドに散らばった球を拾い集めていた。彼らもそろそろ、帰宅の時間なのだろう。

「よっ坂本。また会ったな。今帰りか？」

真後ろから声をかけられ、私は思わずびくりと肩をふるわす。振り返った先に立つのは私の不調の原因である吉岡だった。

「……吉岡。サッカー部にしてはずいぶんとご帰宅が早いんじゃない？まだ６時前だよ」

声がふるえてないか、表情が硬くなってないか、私はそれが心配で、必要以上に明るい声を出した。

「明後日、試合があるんだよ。だから調整のために今日の部活は５時で終了」

サッカー部に学校が定める『最終下校時刻』はない。
強化クラブいわれる関東大会優勝などの好成績を残す部は、最終下校時刻を越えての部活動の練習が許されている。そしてサッカー部はその強化クラブだった。

「有栖川を待ってるのか？」
「うん。雪子、職員室に生徒会室の鍵を返しに行ってるの」
「相変わらず仲がいいんだな。俺もさっき職員室に部室の鍵を返しに行ったんだけど、有栖川、学年主任にとっつかまってたぞ」

吉岡は苦笑気味に言う。だから有栖川が来るにはもうちょっとかかるだろうな、と。

「えっ？なんで」
「あいつ、生徒会長のくせにマニキュアしてただろ？それで小言言われてたぞ。ま、有栖川だから小言だけですんでたみたいだけど」
「……雪子は先生ウケがいいから」
「ウラヤマシイ限りだな」
「吉岡も十分、先生たちのお気に入りだよ」

茶化した口調で言う吉岡に対して、私も冗談気にそう返す。

「だろ？俺って老若男女問わずモテモテだから」
「だから自分で言っちゃダメだって」

気安い雰囲気で私に接する吉岡に安心して、ついつい私の緊張もとける。

「相変わらず坂本は手厳しいな」

そう言いつつ、吉岡の表情は優しかった。
そんな顔を向けられると、心臓のあたりがキュンっとなる。
彼への気持ちを自覚してしまった今、その威力は抜群だった。
せっかく緊張がほどけていたのに、ドクドクと心臓の音が鳴り響く。
そして同時に、その感情の高鳴りは私に恐怖をもたらした。
怖い。
やわらかで苦しい気持ちとは別に、その感情が私を支配する。

「なあ、『チェコスの階段』、覚えてる？」
「……うん」

思考が正常に動かない状態でありつつも、私は頷いた。

「俺さ、この前久しぶりに学校の図書室に行ってその本借りて読んだんだ。んで、読んでたら、お前のこと思い出した」
「……」
「はじめて話したとき、『チェコスの階段』のことで盛り上がっ

たよな。俺、あの時すげえ楽しかった」

どこか照れくさそうな表情を吉岡はする。羞恥のためか、彼の視線は泳いでいた。

彼のそんな反応を見れば、普通の状態であれば、私は彼のサインに気づいていたかもしれない。そして『それ』に対する策を考えられたかもしれない。

けど私の脳裏は、区立図書館ではじめて彼に会った日。それからの吉岡とのやりとりでいっぱいになっていて、気づくことができなかった。

あの日、司書の睨みから逃げ出した私たちは図書館に隣接する公園のベンチに座り、何時間も自分の好きな小説や学校でのささいな、あるいはどうでもいいような下らない話で盛り上がった。

まともに話したのがはじめてなんて嘘に思えるほど会話は弾んで、本当に楽しかった。

それに吉岡は驚くほど真面目で、素直で優しい男の子だった。その想いは学校ですれ違えばそれとなく会話をするようになってから、より深くなっていった。

特別、吉岡とは仲のいい友達になったわけではなかった。クラスは二年生になっても相変わらず違ったし、吉岡はサッカー部、私は生徒会で忙しかった。会えば話す程度で、それ以上のことはなかった。

でもいつだって、吉岡は眩しかった。

そう。私はある時、気づいてしまったのだ。
彼と私には大きな隔たりがあると。

そしていつしか私は彼をうらやむようになっていた。
吉岡は私が心の奥底で抱く劣等感を刺激する存在だったのだ。
でもだからといって私は、吉岡が嫌いなわけじゃない。
嫌いになんてなれるわけがなかった。
今ならわかる。
だって私は吉岡が好きだから。
恋していたから。

でもその、私の複雑な感情が、無意識的に彼を避ける結果に結びつけることになってしまった。
眩しすぎる太陽を人間は直視できない。
しかもその太陽は沈むことを知らないのだ。

私にはどうしようもなかった。
馬鹿なことをしている。もっと気軽に考えるべきだとわかっている。
でもでも、――――――――。

「もしかしたら坂本、有栖川からなんか聞いちゃってるかもしれないけど。正直、もう色々我慢の限界なんではっきりさせたいから言うけど」

吉岡の真剣な眼差しと声音にはっとして、私は一歩後退する。
怖い。
逃げなきゃ。
その想いが足を動かす前に、吉岡の声が放課後の静寂に響く。

「俺、お前が好きだ」
「っ！！……あっ、わ、わたし……」

足は動かない。
声は出ない。
思考も動かない。

「――――なんで泣くんだよ」

吉岡の顔が苦しそうにゆがむ。
涙が私の両頬をつたって流れ落ちていた。

「そんなに嫌だったか。俺、そんなにお前に嫌われてたか？」

吉岡が私との距離をつめる。

「嬉し涙だったらよかったのに……」

吐息のように小さく、頼りない声だった。

「坂本、なんか言えよ。言ってくれ」

全身を硬直させていた私の体が大きく震えた。
吉岡が私の両手をつかんだのだ。
傷ついた――――そう、私は吉岡を傷つけた――――表情、弱弱しい声音とは裏腹に、彼の私の手をつかむ力は痛いぐらいだった。

望む答えが得られぬ限り絶対に離さない。
まるでそんな意志がこめられているかのように。
そして私と彼との距離がゼロになる。
私は吉岡に抱きすくめられていた。

「っ！！吉岡っ！！離してっ！！！」

私は吉岡の頬を思いっきり叩いた。
いや、吉岡の腕の中で激しくもがいた結果、手が彼の頬に当たってしまったのだ。

だって、だって彼に抱きしめられている。
それは私をさらなる混乱へと導いた。

「どうして……」

答えはない。

吉岡が私のことを好き？
そんなのありえない。
そんなの信じられない。

暴れる私に対して吉岡は何も言わない。
だたぎゅっと私を抱きしめ続けた。

そしてしばらくして、彼の腕の力がゆっくりと抜ける。
彼の両腕がだらりと下がった。
私は何も言わず、彼に視線をやることなく、一目散に逃げ出した。

親友

雪子からケータイに電話がかかってきたのはその日の夜１０時だった。
夕飯も食べず、制服を着たまま自分の部屋のベッドに飛び込んだ私はその着信メロディにはっとさせられた。
雪子と一緒に帰る約束をしていたのに、私は彼女を置いて一人で勝手に帰ってきてしまった。なのに私は雪子になんの連絡もしていなかった。
一人我を失って、自分の部屋のベッドでめそめそと泣いていたのだ。
止まらない着信音とバイブの発信源に私は慌てて飛びついた。

「もしもしっ！！！雪子！？あの、あの私、本当にごめんなさいっ！！何も言わずに勝手に帰っちゃって……ごめんね。ごめんね。……あの雪子？」

ケータイにむかってまくし立てた私に対して、相手の応答がなかなかこない。
数秒の後、電話の向こう側から激しい爆笑が聞こえた。どんな時でも明るい雪子の笑い声だった。若干、品がないともいえる豪快な笑い。
いつも通りの雪子。
怒っているようではないようだった。
でもそれが逆に恐ろしくて、私は雪子の言葉をびくびくしながら待つ。

『ちょっと梨香、あんた今の今まで一人で大泣きしてたんでしょ？声は掠れてるわ、鼻声だわ、乙女としてどうなのよそれ。加えて私をほっぽいて一人で帰ったことを気にして大慌てしちゃってさ。あんたちょっとは落ち着きなさいよ』

「……怒ってないの？」

雪子に指摘された鼻声でおそるおそる聞く。

『全然。怒るわけないじゃん』

「でも私、何も言わずに帰っちゃったよ」

『確かに梨香からは直接何も聞いてないけど、そのかわり吉岡から話は全部聞いたから。ちなみに謝罪もかわりに吉岡から受け取っといたから』

「吉岡がっ！？ってか話しを全部聞いたってどういうこと！？」

あっさりと告げられた内容に、私は声を大きくした。

『職員室出て昇降口行ったら、待ち合わせているはずの梨香がいなくて、そのかわりにやけに悲愴な顔してる吉岡がいたから、どうしたのって聞いたの。そしたら全部。一通りの流れを。んでもって、私を置いて梨香が一人で帰ったのは自分のせいだから、あんたを怒らないでやってくれって』

できた男ですこと。
皮肉でも冗談でもなく、心底そう思っているだろう響きで雪子は最後にそうつけたした。

「……そっか。全部、雪子は聞いたんだね」
『うん。聞いたよ。あの状況でそれを第三者に言えちゃう吉岡の神経の図太さというか、たくましさには驚いたけど。――――でもそれも全部、梨香のためだね。吉岡、私に言ったんだよ。梨香を泣かせちゃったから、あとで様子を見てやってくれって。ま、言われなくてもそんな話を聞いたら、梨香に直接会いに行くでも電話するでもなんでもするけど』

幼馴染のあたたかい言葉に、ぽろりと涙が再びこぼれる。
私にはこんなにも親身になってくれる親友がいて、――――私を好きだと言ってくれる男の子がいる。
傍目から見たらなんて私は贅沢もので、それを素直に受け止められない私はなんて愚かで礼儀知らずな人間だろう。
どうして私は吉岡の気持ちを喜べなかったんだろう。

『梨香、あんたどうして吉岡をふっちゃったの？』
「……わたし…」

言いよどむ私に雪子の冷静な声がかかる。

『なんの返事もしてないんだよね？本当は？吉岡はあんたに振ら

れたって言ってたけど、好きって言われたことに対して何の返事もしてないんじゃない？』

雪子の言葉に反論の余地はなかった。

「うん。なにも、何も言えなかった。……怖かった。怖かったの」
『……』
「……ありえないことがおきて、怖かったんだと思う」
『ねえ、梨香。ありえないってなに？』

雪子の声音は優しかった。けれど雪子の質問は鋭く私の胸に突き刺さる。
私は言い返すことができず、押し黙ってしまった。
そんな私に呆れることなく、雪子は続ける。

『ありえなくないんだよ、梨香。だって吉岡はあんたのことが好きなんだから。あんたは吉岡に好きって告白されたんだから。どうしてそれを否定するの？』

数秒の沈黙の後、私は大きく息を吐く。
考えるまでもない。
本当はその答えを私は知っている。
わかっているのに、足がすくんで動けないでいる私を雪子は理解してくれている。だからこんなにも優しく、私を導いてくれようとしている。

「私、吉岡に今日の態度を謝る。それから――――」

決意をこめた私の言葉に、雪子はいたわりのエールをくれる。
今日のことで完全に吉岡に嫌われてしまったとしても、雪子がいる。

「ねえ、雪子。今度なにかあったら、私が絶対に雪子を守ってあげるからね」

私に強さを与えてくれる親友に、頼ってばかりはいられない。

『梨香に助けられるようじゃ、私もおしまいだ』
「ひどい。私じゃ頼りにならないって？」

雪子の冗談に私の心も軽くなる。

『さあ？』

おどけた口調の雪子の言葉を聞きながら、私は頬に流れる涙をぬぐった。

憧憬

「坂本……？どうしたんだよ、こんな朝早く」

翌日の早朝。学校の周囲を走りこんでいた吉岡は正門横に立つ私の姿を見て、驚いた顔をした。だがすぐさまその顔はバツの悪いものへと変わる。昨日のことを考えれば当たり前の反応だった。

「吉岡を待ってたの。話しがしたくて」

サッカー部の朝練を毎日こなす吉岡はうっすらと汗をかいていた。私はそんな彼の顔を直接見ることができず、彼の足元を見ながら言った。勇気は、この場にくるだけで使い切っていた。

「……」

「あのっ、私たち、学校じゃよく喋ってたけど、お互いのケータイの番号とか知らないでしょ。朝練の邪魔だとは思ったんだけど……。放課後、部活が終わった後とかでいいの！時間ある？」

反応の鈍い吉岡の様子に、私は慌ててそう付け足した。

試合を明日にひかえる吉岡の邪魔をすることはできない。でも話しかけるならこの時間帯しかないと思った。

授業の合間に話しかけることもできるだろうが、私たちの間に流れる微妙な空気はきっとあからさまにクラスメイトたちに伝わってしまう。吉岡の存在は常に注目されている。話しかけるなら朝練をする部活動の生徒ぐらいしかいないこの時間帯が一番、結果的に吉岡に迷惑をかけないと思ったのだ。

私が吉岡の答えを待っていると突然、彼がその場にしゃがみこんだ。それからサッカー部のジャージを着こんだ吉岡は両手で顔を大きく覆い、小さく唸り声を上げた。

「よ、吉岡？」

「よかった。……もう坂本と話せなくなると思ってた。しかもそっちから話しかけてくれて、話しの内容がなんだろうとすげえ嬉しい」

なんかちょっと安心したら気が抜けた。

吉岡はそう言うと、しゃがみこんだまま顔を上げた。必然的に、彼が私を見上げる形になる。なんだか珍しいアングルだった。

「俺、あんなことしちゃったし、もう嫌われたかと思った」

それは吉岡が私のことを抱きしめたことを指していた。今更ながら恥ずかしくなって、私は顔を少し赤くした。

心なしか、吉岡も照れている気がする。

なんだかこの場にいるのがむずがゆくって、私は早口で言った。

「あのっ、放課後、待ってるから！朝練の邪魔だろうし、もう行くね！じゃ、じゃあ、またあとで――――」
「ちょっと待った！！」

早足で立ち去ろうとした私の右腕を吉岡が立ち上がり、飛びつくようにつかんだ。衝撃に私の身体は吉岡のほうによろめく。

「っ！！」
「あ、悪い。話なら、話しなら今聞くから！」

吉岡は私の腕をつかむ手を離す。

「今日、朝練ないんだ。走ってたのはただの……その、自主練みたいな」

なぜか吉岡の歯切れは悪かった。だがその理由を探る余裕はもちろん私にはなかった。

「……そうなんだ」
「あの、じゃあ、移動する？さすがにここじゃなんだし」
「そうだね。正門じゃ、そのうち人もたくさん来るだろうし。あっ、吉岡、制服に着替える？」

「いや、大丈夫。というか部活の朝練とかじゃないから、着替えとかは部室じゃなくて教室に置いてある」

そんな会話をしながら私たちがむかったのは校舎の屋上へと続く階段の踊り場だった。うちの学校は安全を理由に屋上への出入りは禁止されていて、扉にもしっかりと鍵がかかっている。けれどその踊り場は昼休みなどには生徒たちの溜まり場となっていて、私もよく階段の段差を椅子に雪子とおしゃべりをしたりしていた。

だがまだ部活熱心な運動部ぐらいしか登校していない時間帯である。校舎の中はただ静かで、遠くにかすかに野球部特有のバットにボールが当たる音が聞こえるだけだ。

どこかぎこちない雰囲気の私と吉岡だったけれど、自然と、当然のようにお互いの横に座った。

そして切り出したのは吉岡だった。

「自分の傷口広げるだけかもだけど、はっきりさせたいから聞くな。俺、坂本に嫌われてるのか？最近、俺のこと避けてただろ」

「ごめんなさい」

心からの謝罪だった。

吉岡を傷つけてしまったのは間違いないことで、そして私はそれを自覚していながら、回避することができなかった。

「やっぱ、避けられてたのか……」

吉岡は大きくうな垂れた。
目に見えて落ち込んでいる吉岡に、私はとんでもないことをしてしまったと胸がじくじくと痛んだ。ぎゅっと胸元にあてていた右手の拳を強く握る。

「なんで？俺、なんか嫌われるようなことしたか？」

すがるような目だった。

私はすぐさま首を横にふった。

「じゃあ、なんで……」
「吉岡は私にとって――――」

私は言葉を途中で切った。
昨日の雪子との会話。
気づいてしまった自分の気持ち。
今なら、今ここで勇気を出せばきっと何かが変わる。
私は吉岡の目を見た。

「――――――憎らしいほどに、愛しい人なの」

言った瞬間、言葉の内容への羞恥でいっぱいになった。でもそれ

以上に、不思議な充足感と開放感がある。
私は自分が笑っていることに気づいた。
そんな現金な自身の反応に、どうしようもないな、と思う。

吉岡は何を言われたのか理解ができない、とでも言うようにぽかんとしていた。だがだんだんと目を白黒させて、表情を赤くしたり青くしたりしてから口を開いた。

「……もしかしてそれは、俺のこと好きってこと？」
「うん」

照れくさいながらも私は頷いた。
その瞬間、吉岡は利き手で自分の口元をおさえ、視線を私からそらした。

「マジで？」

そう言う彼の顔は真っ赤だった。
さわやかで頼りがいがあってカッコいい吉岡恭祐。
明るい人間で、クールな人間だと言う認識は最初からなかったけれど、吉岡はあまり物事に動じないタイプだと思っていた。笑顔でどんなハプニングや苦難にも立ち向かい、うまく立ち回れる人間だと。けれど今日の彼は驚くほどに表情をころころと変えて、人間味にあふれていた。
なんだか彼のことが、素直に好きだと思える。

あれ、なんだか私、余裕が出てきたな。

自分の思いを素直に口にすることは凄まじい効力を私にもたらしていた。

私の心はものすごく、穏やかになっていたのだ。

「いやでも、憎らしいってどういう意味？それに俺のこと……好きって言うなら、なんで昨日、あんなふうに泣いたの？」

「……怖かったの」

「えっ、……怖かった？」

まさしく肩透かしを食わされたように、吉岡は怪訝な顔をする。

「俺、普段からすげえ怖い顔とかしてた？それで昨日も怖がらせたとか」

「ううん！違うのっ！！」

俺が悪かったのかと首を傾げる吉岡に私は慌てて否定する。

だって吉岡は何も悪くない。

「吉岡の表情が怖いとか、そんなんじゃないの。昨日泣いたのはありえないことがおきて、怖くなったの。吉岡が私を、その、好き

って言ってくれて、それが信じられなかったの」
「……俺、前々からそれとなく坂本にアピールしてたつもりだったんだけど」

それにそれじゃあ俺が避けられていた理由はちっともわからない。
吉岡の言葉はもっともだった。

「あのね、私ね……」

私は想いを口にする。
それはとても気恥ずかしいことだったけれど、彼への気持ちに正直になってしまった今だからこそ言えることだった。

「私ね、なんていうか、吉岡に対して嫉妬をしてたの。ずっとずっとうらやましいなって思ってた。……憎らしいぐらいに。何かが違えば私は吉岡を嫌ってたかも」
「うらやましいって何が？」

まったく理解できない。
吉岡の顔にはそう書いてあった。

「吉岡だってある程度はわかってるんでしょ。自分に人気があるとか」

私は吉岡の言葉を待たず言葉を続ける。

「雪子にも同じようなことを言ったんだけど、吉岡は誰もが認めるかっこよさがあるよ。性格だって明るくて人気があって。部活で忙しいはずなのに勉強もちゃんとこなしてる。サッカー部の部長やったり、クラスでも頼りになる。モテるくせしてわりとストイックで真面目だし。普通の高校三年生男子としたら出来すぎなぐらい出来すぎな男ですよ、吉岡恭祐は」

「そんな大真面目に言われると、反論もできないし、照れたりもできないな」

まあ嬉しいけど。

そう言いつつも、吉岡は苦笑を浮かべていた。さわやかイケメンはイケメンなりに、何か思うところがあるのだろう。

人から人気があったり、注目されたりすることは決して楽ではない。

それぐらい私にだってわかる。

わかるからこそ、私は吉岡を避けていたのだ。

だって彼はその苦難をあっさりと、重荷なんて感じていないかのように乗り越えられる強さを持っている。そしてその強さは誰もが持っているものではない。

「じゃあ、なんで坂本はその『人気者』を避けたんだよ。普通なら逆だろ」

「さっきも言ったけど、憎らしいほどにうらやましかったの。吉岡のことが。だから……吉岡を見ていると苦しかったの。吉岡を見ていると、自分のダメなところがすごく、すごくわかるの」

吉岡の近くに立つことは自分の『負』を浮かび上がらせることだった。

私にはそれがたまらなかった。

「正直俺、坂本の言っていること、全然理解できねえ」

吉岡の表情は苦しげだった。そしてどこか悲しそうに私を見ている。

「だって坂本は勉強もできるし、部活とかはやってないみたいだけど、生徒会でバリバリ活躍してるだろ。それに体育の授業見てても、運動神経もよさそうだし、オールマイティーになんでもこなせる人間じゃん。それに坂本だって、俺からすれば人気者だよ。有栖川もそうだけど、坂本も姉御タイプでまわりから頼りにされてて、いつもみんなの中心にいる」

吉岡の言葉は力強かった。まるで私に言い聞かせるかのように。

「そんな坂本に、俺のどこをうらやむ必要があるんだよ」

「……わたしね、こんなことを言うと誤解されちゃうかも知れな

いけど、昔から人並み程度までならなんでもできるんだ」

吉岡は私の自嘲気味の言葉にかすかに笑い、頷いた。

「そんな感じだな。俺のほうが、お前のことうらやましい。けっこう不器用だからさ、俺。何するにしても時間がかかるんだ」

吉岡はそう言うけれど、私は知っている。

私の横に座る男は苦労することなく何でもできるような顔をした、努力の天才だと。

あんなに毎日、サッカー部の練習に明け暮れていて、成績を落とさないのは彼が元々勉強ができるからじゃない。吉岡はその分、努力しているのだ。そして誰にも負けない情熱を持ってサッカーの練習にも力を注いでいる。

放課後、一人居残り練習を続ける吉岡の姿があった。早朝の職員室、ハードワークすぎることを先生に戒められている吉岡の姿があった。

ふと気づけば彼はいたるところに努力の爪あとを残していた。

「それだよ。それがうらやましいんだ。吉岡はさ、最初から上手くいかないことも、苦手なことも努力して、時間をかけて乗り越えられるんだよ。乗り越えるための強さも、闘争心も持ってる」

素直な気持ちになれたとはいえ、私の言葉は固かった。

「でもね、私って『闘争心』とか『競争心』ってのが欠如してるの。人に負けても全然悔しくないし、継続的な努力ってのができないんだ。そこそこ勉強も出きるし、運動だって人並みにはできる。でも何かで一番になったことって一度もないの。一番になりたくて頑張ってみたこともあったけど、そこまで辿り着けるだけの力がないの。ねえ、どうしたらそんなに頑張れるの？どうしたらがらむしゃになれるぐらいのものを持てるの？」

馬鹿げた悩みだと言われるかもしれない。
でも私は苦しいほどに悩んでいるのだ。
幼い頃からこれがすべてのコンプレックスのもとだった。

「……なんとも贅沢な悩みだな」
「自覚はあるよ」

私は胸がじくりと痛むのを感じた。
この悩みを私は雪子以外に打ち明けたことがない。だって『贅沢な悩み』だと言われるのがわかりきっているから。
人並み以上になんでもできるなら、それでいいじゃないか。
それがある種の才能でうらやましいよ。
優しい人ならそんなふうに言ってくれるかもしれない。

「……悪りぃ。坂本の悩みは深すぎて正直、俺にその『答え』はわからないよ。だって坂本はなんでもできる完璧な人間になって、まわりからちやほやされまくる人間になりたいわけじゃないんだろ」

「もちろん！そんなんじゃないよ」
「だったらなおさら難しい。坂本は俺のことやけに評価してくれてるけど俺だってサッカーがなけりゃ、とんだ怠け者だろうし」

坂本は腕組みをして唸る。

「……サッカーはさ、個人の技量ももちろん重要だけど、やっぱりチーム戦なんだよ。特に高校の『部活動』だしな。一人でやってるわけじゃなくて仲間と、一緒になって、一つになって突き進むわけだ。そこから言えることだけど、誰かと同じ目標を持った人間の近くにいえるとお互いに刺激しあえて、よりモチベーションを持って取り込めるんだと思う。身近に常にいることで坂本の言う、闘争心にも火がつくし。よくお互いに切磋琢磨って言うけど、本当にそれだな」
「でも私、特別目標なんてないよ」

自分でも子供っぽい言い草だと思った。

「じゃあ見つけるしかないな」

吉岡は笑いも呆れもしなかった。真剣な眼差しと声音だった。

「切磋琢磨だとか、夢を見つけるだとか言ったけど、坂本は自分でも全部わかってるんだろ。わかってるから苦しいんだ。人間、馬

鹿なほうが、気づかないほうが幸せなことが多いから」

それは私への慰みの言葉という重さ以上に、なぜだか自分自身にも見に覚えがあるとでもいうような、共感の色が濃かった。

私はそれが不思議で吉岡の顔をじっと見る。

「なんだよ、坂本。俺にだって悩みはたくさんあるんだ。好きな女の子が好きって言ってくれて嬉しいんだけど、どうも俺は同時に憎まれているってさ」

冗談の付け加えられた言葉だったけれど、それを言った吉岡の目はひどく真剣だった。

「ところでさ、俺的にすごい重要なんで聞くんだけど、つまるところ俺たちはこれから『付き合う』ということになるんだよな？」

「えっ！？」

私は吉岡の言葉に思わず動揺する。

「えっ！？って吉岡、俺がビックリだよ。俺は坂本のことが好きで、坂本もそう言ってくれただろ」

そうなるのが自然の流れだろ。

吉岡の目がそう私に訴えかけてくる。

「えっと、あの……」

私はどもった。

吉岡と私がつきあう？
つまり、彼氏と彼女になる……。

正直、それを期待して今日、吉岡の前に現れたわけじゃなかった。
あくまで吉岡に昨日の態度を謝りたくて。
それに……私、吉岡と付き合えない。
そう思った瞬間、真っ直ぐすぎる眼差しと言葉が私に降りかかる。

「俺、坂本のことが好きだよ。坂本が俺の彼女になってくれたら嬉しい。だから今度は逃げずに返事をくれ」

やっぱり吉岡は眩しすぎる。
自分の涙腺がゆるむのを感じる。

「なんでまた泣きそうになってるんだよ。しかもまた嬉し涙じゃなさそうだし」

吉岡の日焼けした指先が私の頬をなでる。
触れられた頬にやどる熱さ。
ちっとも嫌じゃなかった。

「俺とは付き合えない？」
「……吉岡は私にはもったいないよ」

そう。もったいない。

「たとえもったいなかったとしても、俺がいいって言うならいいだろ別に」

吉岡の語気は荒かった。

「ダメだよ。無理だよ」
「……わかった。俺はよくわかった」

突然、がっしりと私は両肩をつかまれ引き寄せられる。
吉岡の顔がすぐ目の前にある。

「坂本、お前はああだこうだと御託を並べて、自分がどうすればいいのかわかってるのに全然動けないでいるのは、単にお前に自信

がないからだ！もっと自信持てよ自分に！！！」

強烈な言葉だった。
そして、それは図星だった。

私に足りないものは結局、『自信』。
吉岡への劣等感も日々私が感じているもどかしさも、全部全部自分に自信がないせい。
私はそれに気づかないふりをして、自分には夢がないだとか口にして自分をさらに否定してきた。自分に自信を持たなくては例え夢を持ったとしても、輝くことなんてできないのに。

「……自信なんて、自信なんてもてないよ」
「だったら俺がもたせてやる」

自信を持つ、それだけのことに困惑する私に力強い言葉が降り注ぐ。

抗えない力がそこにはあった。
その眩しさに逃げていた自分だったのに、今は驚くぐらい引き寄せられている。
すいよせられる。
その私だけに注がれる眼差しに。
もう逃げられない。

私は頷いた。
そして今までで一番眩しいと感じる、彼の笑顔を見た。

弱虫な二人

茜色の空から差し込む夏の夕日が眩しかった。
私は吉岡の横顔をじっと見つめる。彼は驚くほど上機嫌な表情をしていた。

私の手を引いて、学校から駅までの距離を歩く吉岡。
あっさりと、あまりにも自然につながれた手。

思えば付き合うことに頷けたのも、吉岡の強気な態度があったから。
こういうところが強豪サッカー部の部長を務める人の『強さ』なんだろうとか思ってしまう。

あの後、私たちはごくごく普通に授業を受けた。同じクラスの私と吉岡だったけど、必要以上に意識し合うこともなく、二人の間の雰囲気はいたって平穏なものだった。ただふと視線があう瞬間がたくさんあって、そんな時はやわらかい微笑みが吉岡から私に向けられた。
なんだか無性に恥ずかしかったけれど、同じくらいあたたかく嬉しい気持ちになれた。
あんなに散々悩んで苦しんで、吉岡を傷つけてからわずかしかたってないのにこんな甘い気持ちになっちゃうなんて、私は罰当たりかもしれない。

教室では普段と変わらない私たちだったけれど、放課後だけはいつもと違った。部活と委員会、それぞれの活動が終わった時刻に待ち合わせて、同じタイミングで一緒に学校の門を出たのだ。

そんな日々がきっとこれからは増える。

「吉岡はどっち方面？私はこっちなんだけど」

駅の改札を抜け、私は自宅のあるほうへ向かう電車のホームを指で示した。「俺もこっち」そう吉岡は笑って私が毎日使っている最寄りの駅から二つ隣の駅の名前を口にした。

「わりと家近かったんだね」

「だな。でも俺、幼稚園まではもっと坂本とご近所さんだったよ」

よく聞けば吉岡は三歳まで私の近所に住んでいたらしい。しかも生まれた病院が私の家から目と鼻の先にある都立病院だという。ビックリと同時に私は吉岡のことを表面的にしか全然知らないんだとな思う。でもそれで落ち込む必要なんてないんだろう。だって条件は吉岡も私も一緒だ。

ホームにやってきた電車に一緒に乗る頃には、話題が吉岡の生活の大部分であるサッカーになっていた。

「坂本はさ、たとえば、たとえばの話しだけど、俺が将来サッカー選手になって、サッカーで稼げるようなプレイヤーになれると思う？」

突然の質問だった。

何気ない口調だったけれど、なぜか私は適当に答えてはいけない気がした。

「なりたいと吉岡がそう思っていて、なれれば私も嬉しいなと思うよ。正直、そこまでサッカーに詳しくないから何とも言えないけど、でもうちの高校出身のプロだっているし、吉岡の過去の実績を加味しても確率はものすごく低くはないんじゃないかな」

「ものすごく低くはないって、高くはないってのと同じ意味じゃん」

吉岡は笑った。気に障ったようではなかったけれど私は慌てて付け足した。

「だって無責任なことは言えないよ。そんな甘い世界じゃないってことは吉岡のほうがわかってるだろうし」

「うん。そうだな。俺もそう思う。というか、俺は１００パーセント絶対にサッカー選手になることはないなって思う」

あっさりと告げられた言葉に私は目を丸くした。

厳しい世界だって言うのは誰にだってわかることだ。けれど吉岡の目標は、夢はそこにあるものだと思っていた。私だけじゃない、きっとうちの高校の誰もがそう思っている。

「えっ？だって、うちの高校からプロになった選手だっているんだよ！確かに日本代表とかなるようなサッカー選手にはなれないかもしれないけど！！吉岡は毎日努力してるじゃん！そんなあっさり――――」

「いや、別に夢から逃げてるんとかじゃなくて、言い方が悪かった。……俺、別になりたいものがあるんだ。だからサッカーは高校でやめる。遊びでフットサルとか、大学でやるかもしれないけど真剣にプレイヤーとしてサッカーをやるのはこの夏の大会が最後。大会が終わったら、大学受験に燃える受験生の仲間入り」

弱気になっているのかと勘違いした私に吉岡は苦笑いをする。

「この話しをすると、みんなそういう反応するんだよな」

「……そりゃそうだよ」

私はまじまじと吉岡の顔を見てしまう。ずっとそうであるものだと思っていたことを覆されたような時に受ける衝撃だった。

「そんなビックリした顔するなよ」

「ごめん。……もしかしてこれって吉岡が言っていたたくさんある悩みの一つに含まれる？」

「ご名答」

もしかして、と思って口にした疑問は正解だった。

――――――人間、馬鹿なほうが、気づかないほうが幸せなことが多いから。

――――――俺にだって悩みはたくさんあるんだ。

吉岡は確かそう言っていた。

「吉岡の夢って何？」

「小学校の先生」

吉岡は小さな子供が内緒話をするように私の耳元でささやいた。近すぎる距離に思わずドキリとする。

こんな簡単に距離を詰められて、若干不安になる。モテルわりには硬派だと思っていたけれど、そうでもないのだろうか。

あとでそれとなく探ってみたい。

「意外？」

「ううん、全然。むしろ似合ってる」

私はすぐさま首を横にふる。

吉岡はすこぶる面倒見がいい。サッカー部の後輩たちが吉岡を慕ってよくクラスに顔を出していたのを私は知っている。その時の吉

岡は優しく気さくにおおらかに、それでいて年長者の貫禄のある表情をしていた。
小学校の教壇にたって子供たちに算数や国語を教え、体育の授業では校庭を一緒になって走り回る。
そんな姿を連鎖的に想像して、まったく違和感がないことが逆におかしかった。
私は笑って、「本当に似合うと思う。吉岡、絶対に小学校の先生むきだよ」と付け足す。

「そっか。ありがとう」

吉岡は嬉しそうに笑う。けれどそれは満面の笑顔ではなかった。

「そういうふうに、他のやつにも言ってもらえたらいいんだけどな」
「……」

私は何も言えなかった。

確かに私は吉岡がサッカーで努力していることを知っている。
けれど実際の、サッカー部での部長としての、選手としての吉岡を知らない。後輩たちに優しい顔をする吉岡だけれど、きっとそれだけじゃない。本当の意味で人に慕われる存在はきっと時に厳しいことも言うはずだ。勝ちにこだわり強い態度に出ることもあるのだろう。それは彼のサッカーへの情熱の度合いを示している。

そしてそんな顔を知っている人間ならば絶対に言うはず。

なぜサッカーをやめるのだ、と。

「俺、幼稚園の時からサッカー始めたんだけど、きっかけはオヤジなんだ。オヤジが俺をサッカー選手にしたかったらしくって。で、小学校の先生になりたいって言ったらオヤジは反対するし、部活の顧問の先生も仲のいい友達もビックリしちゃってさ。みんな言うんだ、サッカーをやめるなって」

「そりゃそうだろうね……。吉岡はサッカーが上手いんだもん。だからうちの高校のサッカー部で部長をしてるんだろうし」

もちろん部長であることと、サッカーが上手いことは別物だ。リーダーになる素質とスポーツの技能の優劣はまったく違う素質である。しかし中学高校における部活動、特に運動部においてはそれが同等と見なされることが多いように思う。そしてサッカーがある一定以上上手くなければ入れないうちの高校のサッカー部部長となれば言わずもがな、である。

「もちろんサッカーは好きだよ。さっきも言ったけど、きっと大学に入ったらサークルとかで絶対にサッカーやるだろうし。……サークルでサッカーなんてもったいない、そう言われるんだろうけど」

「……贅沢な悩みだね」

それは私が吉岡に言われた言葉だった。

けれど今、私はそれを吉岡に使った。

「確かに贅沢な悩みだな。でも贅沢な悩みに見えるかもしれないけど、めっちゃ怖いよ」

――――怖い。

その吉岡の一言に私ははっとする。

「サッカーで活躍しろっていう周りからの無言のプレッシャー。それに別に夢がある、とかカッコいいこと言ってるけど本当は俺の夢はやっぱりサッカーにあって、その一番の夢から逃げてるんじゃないかっていう自分自身への疑問。サッカーをやめる、って言ったけど、別にサッカーが嫌いになったわけじゃないし。たかが１８年しか生きてないわけだけど、やっぱりサッカーが俺のすべてだったわけだしな」

吉岡はそこで一息ついて私の顔をじっと見つめる。

「坂本は俺がうらやましいって言ってたけど、俺こそ坂本がうらやましかった」

それは私にとって信じられない言葉だった。

吉岡は私にとって完璧な存在だった。もちろん頭では完璧な人間などいやしないとわかっている。でも吉岡は私にとっての憧れであり、私の足りない部分すべてを持っている存在だったのだ。

その彼が私をうらやましい、という。

「……」

「信じられないってか？坂本は本当に自分に自信がないんだな。見た感じは自分に自信があって、いつも堂々としてるのに」

吉岡の言葉は私をけなすものではない。

だって彼の目は恥ずかしくなるほどに、慈しみの眼差しを私に向けているのだ。

「坂本はさ、めっちゃ凛としてるんだよ。学校で行事ごとがあるとさ、いつも皆の中心になって意見をまとめて、人を動かして、活発に動いているだろう。そういうのって俺も部活で部長やってるからわかるんだけど、けっこうしんどい時もあるだろ。でも坂本はいつもにこにこしてて。俺はそれをずっとすげえなって思ってた。それになにより、俺からすれば坂本は何事にもブレない人間に見えるんだ。坂本の言うことはいつも筋が通ってるし、説得力がある。未来が見えてる感じ。だから自分の将来が不安でたまらない俺には、そんな坂本がうらやましかったってわけ」

「……ありがとう」

吉岡にとっては弱音の吐露だったかもしれない。けれど私には嬉しい言葉にしか聞こえない。

「なんか自分に自信が持てそうだよ」

「言っただろ。俺が自信を持たせてやるって。あ、でも別に今のは自信を持たせるために言ったんじゃなくて、俺の本音だからな」

吉岡の言葉に笑顔を浮かべた私だったけど、表情とは裏腹に涙腺がゆるむのを感じた。もちろん嬉しいからだ。

なんか今日は、いや昨日から涙腺はゆるみっぱなしだ。電車の中だというのに恥ずかしい。私はカバンからハンドタオルを取り出して、目元にあてる。

「今度は嬉し涙だな」

「そんな嬉しそうな声ださないでよ！」

嬉々として言ってくる吉岡を、私は片手でグーを作って軽く叩く。

「だって嬉しいからさ。――――俺たち、お互いのこと全然知らなかったんだな。二人してうじうじ悩む弱虫だ」

私は拳を引っ込め、吉岡の顔を見る。

自虐的な言葉だったけれど、相変わらず穏やかであたたかい表情をしている。私の体の中心からじんわりと甘いものが生まれていく。

「でも悪い気はしないな」

「どうして？」

「俺が弱虫野郎だっていうのがバレたのは恥ずかしいけど、坂本

も本当は弱虫だって知れて嬉しいってこと」
「……」
「坂本は？坂本は俺が弱虫だって知って、俺のこと幻滅した？」
悪戯気な瞳が私の顔をのぞきこんでくる。
「ううん！まさかっ！！」
否定をする私の頬はたぶん、涙に赤くなった以上に色づいている。
私たちは表面的なことでしか、お互いのことを知らない。吉岡には私の知らない部分がたくさんあり、きっと私にも吉岡が知らない部分がたくさんある。
「幻滅なんてしないよ。それにこれからお互いに、お互いのことをもっと知っていけばいいし」
吉岡のこと、もっと知りたいよ。
自然にこぼれた一言に、吉岡の表情が大きく変わった。
「……坂本は俺を一喜一憂させる天才だな」
「吉岡、顔が赤いよ」
「お前もだよ」

二人して顔を赤くして恥ずかしさに視線を外したとき、電車内に私の最寄り駅が次の停車駅であることを告げるアナウンスが流れる。

「なあ、梨香。実はすっげえ弱虫な俺だからさ……、俺のこと、そばにいて見張ってて。その代わり、俺がお前に全力で自信、持てるように応援するから」

真っ直ぐな眼差しが私を射抜く。

電車が駅に到着し、開いた扉。まわりの人たちが乗り降りを始める。

動けないでいる私に吉岡が微笑んで、下車するように私を促す。それは二人で扉前まで歩き、最後に私が返事をしようとした一瞬の出来事だった。

あたたかいものが私の唇に触れる。

あまりにも素早く鮮やかに行われたそれはまぎれもなく、キスだった。

驚きに目を見開く私に吉岡は照れ笑いをし、とんっと軽く私を車内から押し出す。駅のホームに降り立つとすぐに、電車の扉が閉まる。

「……全然、弱虫じゃないじゃん」

だって電車の中に人がたくさんいた。
あの男、なんてことをしでかしてくれるんだ！
それに私のこと、……名前で呼んだ。

泣き笑いを浮かべた私に、ゆっくりと発車する車内で彼は微笑んだ。吉岡が私に軽く手を振ったのを見送ったあと、しばらく私は呆然とその場に立ち続けた。

「も、文句言ってやるんだからっ！！！」

でも、その前に、と、とりあえず、雪子に連絡だっ！！！！

はたと気づいた瞬間、私は大きく叫んでいた。
次の電車を待っているであろうサラリーマンが私の叫び声にびくりと肩をふるわす。
それに気づいてしまった私は今日一番顔を赤くして、改札にむかって走り出す。

吉岡の、吉岡の……、
きょ、恭祐の馬鹿野郎っ！！！！

そんな風に心の中で吉岡を罵倒し続ける私の表情は人生で一番輝いていた。
明日から吉岡のこと、恭祐って呼ぼう。

にやける口元を誰にも見られたくなくって、改札を抜けてなお私の足は走り続ける。

夏の風が頬をなでる。
湿気を含んだそれがちっとも嫌じゃない。
明日の天気はたしか快晴。

よしお……恭祐の試合を応援しに行こう。
もし試合に勝ったなら、さっきの出来事をチャラにしてあげてもいい。
そんなふうにメールしたら明日、いつも以上に頑張ってくれるかな。

私の胸は彼のことでいっぱいだった。

私は自分に対する自信が足りない。
でもきっと憎らしいほどに、これからもずっと吉岡恭祐を好きでいる。
それだけは不思議と、自信が持てた。

F
I
N

弱虫な二人（後書き）

みなさん、こんにちは！
『Ｐｒｏｖｏｋｅ』はこれで完結です。
最後まで読んでいただき、ありがとうございます！！！

うじうじと悩む主人公に共感することができなかったり、
むしろイライラさせたかもしれませんが、
今回の主人公梨香はあえて、そういう人間であるとして書きました。

まえがきにもあった通り、
このお話はだいぶ前に書いたものでしたが、
自分とってはいまだに新しい（珍しい）タイプのお話です。
そんなわけで、旧サイトからお引っ越ししてくるかどうか迷ったのですが、
結局、こちらに移すことにしました。

高校三年生の二人ですが、
私のイメージでは末長くやっていくのではないかと思います笑

連載作品を含め、
また別のお話しも読んでいただけると嬉しいです。
ありがとうございました☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5367r/

Provoke

2011年10月6日10時00分発行